

古代中国の星座

二十八宿とは

最も古いと考えられている中国の28の星座のこと。中国の天の赤道あたりに見える星座です。中国の赤道は360°と1/4°とされ現代の値に近いものでした。これを28区分し、そのあたりにある星座（星宿）を選び、その区分に星宿の名前をつけました。月は毎日28宿の星宿のいずれかに「宿る」と考えられていました。



「石氏簿讀」（せきしほさん）若杉家文書
京都府立総合資料館蔵



「大將軍神像」（だいしょうぐんしんぞう）
市指定文化財 旦稜神社蔵（城陽市）



「真享五年具中曆」 皆川春海作成
（じょうきょうごねんぐちゅうれき）
大將軍八神社蔵（京都市）
府指定有形文化財



「星行度知事」
（ほしのこうどをしるごと）
大將軍八神社蔵（京都市）
府指定有形文化財

夏の大祓

夏の大祓（なつのおおはらえ）は夏越の祓（なごしのはらえ）ともいい、夏至の日を中心とした祭祀で日本では古くより行われていました。中国でも『月令廣義』（明代）の「五月令」にあるように、五月五日に「夏至占」をおこない、雨量を調べるとあります。

日本では、現在でも普通六月の晦日あたりが祭祀日です。姓名・年齢を書いた形代（かたしろ）を神社に納めたり、水に流したりし、あるいは参詣者が茅の輪くぐりをして祓をうけます。六月祓（みなづきのはらえ）や夏祓（なつはらえ）ともいいます。茅輪は八坂神社などより授与される腰の辺りにつける厄除けの護符でもあったようです。

夏越の祓は江戸時代にも幕府の年中行事に組み込まれ、京都の朝廷より使者が江戸城へ遣わされていました。

七夕

七夕祭りは五節句のうちの七夕（しっせき）の年中行事で、七月七日に行われます。乞巧奠（きっこうてん）ともいいますが、実際には違う形式の行事です。七夕祭は、わかっているだけで1900年以上も前からの夏と秋の境目である秋分の期間に行われる星祭だったようです。古くは漢代の司馬遷『史記』の天官書にも牽牛・織女の星宿の名前がみられます。戸外での農作業などを行う時期より屋内での仕事に移り変わる季節です。

この日、天の河をはさんだ兩岸の恋人である織女と牽牛が河を渡り、会う事が出来る日とされ、人々は二人に向けて技の巧みを願い布や糸や針、季節の果物や野菜などを並べ捧げました。

江戸期以前の七夕の日は今よりも一ヶ月程遅い八月七日頃が中心で、月の運行を中心とした太陰暦を使用していました。その日は月の形が舟のような上弦の月となり、二人の逢瀬になくはならない乗り物になります。

※民俗学の調査では、中国では織女が河を渡り、日本では牽牛が河を渡る伝説が多いようです。

朝鮮でも古くからの習慣で、太陰暦の七月七日家々では衣裳を陽にさらして虫干しをします。また、学者たちは家蔵本の虫干しをおこないます。中国、日本とおなじように七夕祭では牽牛・織女をまつり裁縫の上達を祈ります。※『朝鮮歳時記』よりまた朝鮮の現存する最古の史書『三国史記』（1145年成立）に紀元24-56年頃の七月（現在の八月）に新羅の国での麻紡ぎの競争記述がみられます。

六朝時代の荆楚という現代の中国湖北・湖南地方の行事・風俗を記録している『荆楚歳時記』（六朝時代成立）には、次のような伝説が記載されています。

「ある人が筏にのって十数ヶ月、河をゆくと、実際には天の夜空にいるはずの牽牛が渚で牛を牽き河の水を飲ませ、遠く織女の住む宮中がみえた。牽牛が驚きどこから来たのかと問えば、ここはどこなのかと問い返した。すると牽牛は帰って蜀の嚴君平を訪ねなさいという。後に蜀にたどりついて君平に会うと、「そういえばそのころ、牽牛・織女の星座に客星がおとずれていた。夜空の星の動きにでていた」と教えられた」と。

この『荆楚歳時記』にはその他に、「七月は牽牛・織女の“聚会の夜”であり、織女は天帝の外孫であり、織機をあやつり、牽牛はその婿で牛を使い耕作をしている。」と各時代の書を参考に記されています。

■全期間【7月7日-9月2日】

「大將軍神像」旦稜神社蔵（城陽市）【市指定】 「木造天部半伽像」萬福寺蔵（城陽市）【市指定】
「石氏簿讀」京都府立総合資料館蔵 ※期間中一度入替があります。
京都の七夕さん「七夕紙衣」京都府立総合資料館蔵（京都文化博物館管理）
皆川家天文曆道関係資料「黄裳天文図」・「星之行度知事」・「神道程行書」ほか
大將軍八神社蔵（京都市）【府指定】 など多数（順不同）

■前期【7月7日-8月5日】

皆川家天文曆道関係資料 「貞享五年具中曆」 大將軍八神社蔵（京都市）【府指定】
『漢魏叢書』「荆楚歳時記」・「星経」（清・乾隆年間刊本）・「雲根志 別本」（写本）京都大学附属図書館蔵
「南陽 陽鳥星宿画像石拓本」（河南省 後漢墓石）ほか 京都大学附属東アジア人情報学センター蔵

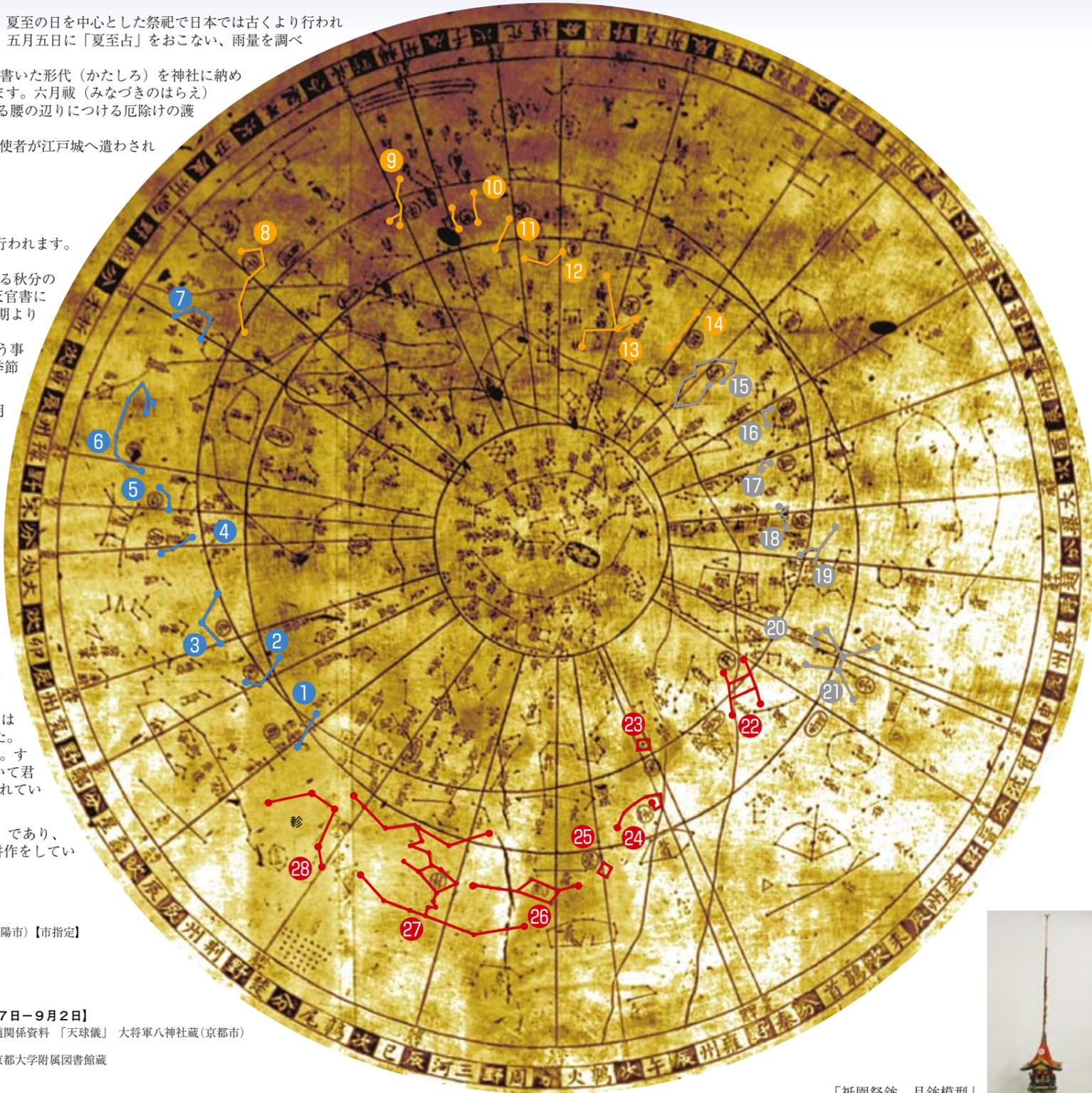
※会期中に展示換えを行います。掲載資料は会期中必ず展示されているとは限りません。御了承ください。

■後期【8月7日-9月2日】

皆川家天文曆道関係資料 「天球儀」 大將軍八神社蔵（京都市）【府指定】

「月令廣義」 京都大学附属図書館蔵

『黄裳天文図』宋代 大將軍八神社蔵



「祇園祭鉾 月鉾模型」
京都府立総合資料館蔵
（京都文化博物館管理）



二十八宿の紹介

※二十八宿は秦・漢初頃のもの（BC221前後）
記載の見方 宿の番号：星宿名（よみがな 中国語発音） 和名（平安時代）
※白抜き数字は左図『黄裳天文図』内の番号に対応しています。

東方青龍

- ①第1宿：角（カク Chio） すばし
ここでは東方を守護する青竜の角にあたる。
左角は刑罰、右角は軍隊を司る。
- ②第2宿：亢（コウ Kang） あみほし
ここでは東方を守護する青竜のくび、のどにあたる。
- ③第3宿：氐（テイ Ti） ともほし
根元。底。青竜の胴にあたる。天帝の妃が住む場所。（天秤座）
- ④第4宿：房（ボウ Fang） そひほし
婦人の部屋。貴人の家には東西2室の房がある。
農業の吉凶を示す星。天帝の四頭立ての馬を示すとも。（蠍座）
- ⑤第5宿：心（シン Hsin） なかごほし
天皇・子・明堂。（蠍座）
- ⑥第6宿：尾（ビ Wei） あしたれほし
青竜の尾（後宮・蠍座）
- ⑦第7宿：箕（キ Chi） みほし
農具。風を好む星。八方から吹く風 口論 異民族のことを司る。

北方玄武

- ⑧第8宿：斗・建星（ト Dou） ひきつぼし
柄杓は分配を表し主婦を象徴することも。天子の寿命を司る。
- ⑨第9宿：牛（ギェウ Niu） いなみほし
牽牛。鋤を曳くようになったのは前4-3世紀のころ。
現在の牽牛ではない。上の一星は道路、中央は関所、その次の星は南越を司る。（織女はこの星宿にいます。）
- ⑩第10宿：女（ジョ Nu） うるきほし
婺女（ブジョ） おんな。むすめ。既婚の女性のこと。玄武の亀の甲羅にあたる。布帛裁縫を司る。
- ⑪第11宿：虚（キョ Hsu） とみてほし
墳墓に待衛する役人。人の住まない空家。天の宰相。（水瓶座・小馬座）
- ⑫第12宿：危（キ Wei） うみやめほし
あやういこと。けわしいこと。天の倉庫・市場・建築のことを司る。（水瓶座・ペガサス座）
- ⑬第13宿：宮室（エイシツ Shih） はつひほし
すまい。天子の後宮。祭祀の室。軍の糧食をいれる倉庫。（ペガサス座）
土木を司る。
- ⑭第14宿：東壁（トウヘキ Pi） なまめほし
室の東にあるので東壁という。（宮廷の図書館）文章を司る。

西方白虎

- ⑮第15宿：奎（ケイ Kuei） とかきほし
天の兵器庫。暴乱を抑える。
- ⑯第16宿：婁（ロウ Lou） たたらほし
宗廟の祭祀に供える動物を司る。（牡羊座）
- ⑰第17宿：胃（イ Wei） えきへほし
天の厨房の歳で、五穀を取める。倉庫を司る。
- ⑱第18宿：昴（ボウ Mao） すばるほし
白虎の背中にあたる。西方及び裁判を司る。（牡牛座・プレアデス星団）
- ⑲第19宿：畢（ヒツ Pi） あめふりほし
長柄のつく網。雨師、風伯。（ヒヤデス星団）
- ⑳第20宿：觜（シ Tsui） とろきほし
角・くちほし。白虎の口先にあたる。
- ㉑第21宿：參（シン Tsan） からすきほし
三つ星。白虎の胸にあたる。北方鮮卑や外国のことを司る。（オリオン座）

南方朱雀

- ㉒第22宿：東井（トウセイ Ching） ちちりほし
天界・地上界・冥界をタテにつなぐもの。天の南門で太陽・月・惑星の通路にあたる。法令の公正を占う。
- ㉓第23宿：興鬼（コウキ Kuei） たまほし
両手でもつ輿にのせられた古代の王の亡骸。天の目。（蟹座）
- ㉔第24宿：柳（リュウ Liu） ぬりこほし
精霊の宿る神木のひとつ。華北の黄土で最初に芽吹く。柳は日月の出入りする。西にあるとされた。南方の朱雀の嘴にあたる。
- ㉕第25宿：七星（シチセイ Hsing） ほとりほし
南方の守護神の朱雀の首にあたる。七星は七政に通じる。
日・月・五惑星、北斗七星、春・夏・秋・冬・天文・地理・人道を表す。
衣服の文様、刺繍を司る。突発的に起こる非常の事件を占う。（海蛇座）
- ㉖第26宿：張（チョウ Chang） ちりこほし
宗廟の祭祀に用い衣服を司る。（海蛇座）
- ㉗第27宿：翼（ヨク Yi） たすきほし
朱雀の翼。天の音楽を司る。（海蛇座、コップ座）
- ㉘第28宿：軫（シン Chen） みつかけほし
車や輿の台を組み立てる横木。又は車。（鳥座）